

シリーズ刊行にあたって

ここに、いわゆる少数言語の記述文法書を、「シリーズ記述文法」として刊行する運びとなった。

言語学の基本的な仕事は、文法を書き・辞書を作り・原語テキストを収集することにある。この3点セットは、その重要性を説いたアメリカの人類学・言語学研究者F.ボアズの名を取り、ボアズ的伝統として広く知られている。しかし、世界に少なくとも6千数百以上あることが分かっている言語のうち、この3点セットが揃っているものはまだまだ少ない。日本語で読めるものとなると、ごくわずかであろう。

近年、言語学は研究分野が細分化し、それぞれの分野で研究の深化が見られた。しかし、一言語は「すべての部分が支え合っている」(A.メイエ)有機的なものであり、細分化されたそれぞれの分野の研究理論がいかに優れていようと、それが言語全体の記述につながらなければ意味をなさない。つまり、言語の研究は、常にその全体を捉えることを念頭に置かなければならぬ。さらに一方では、複数の言語を対象とする対照研究や類型論なども発展してきたが、そのような研究の土台となるのは、個々の言語の信頼できる文法記述にほかならない。

そのような一言語の全体像を捉えた文法書は、さまざまな点を同時に満たす必要がある。情報の正確さ、分析の厳密さ、説明の詳しさが求められる一方、読みやすく分かりやすい必要もあり、情報へのアクセスのしやすさも兼ね備えなくてはならない。

本シリーズで刊行するのは、いずれもこれまでにまったく、あるいは十分には調査研究されてこなかった言語（もしくは方言）である。著者みずからが現地調査で得た一次資料をもとに、対象言語の文法全体を記述している点が大きな特徴である。さらに本シリーズは専門性を高く保ちつつも、当該言

語の専門家以外にも理解できる文法書を目指している。したがって、その言語（あるいはその語族や地域）の研究のみで用いられるような特殊な術語は極力避け、使う場合は説明を入れてある。一言語の文法の全体を記述するには紙幅が足りないのは否めないが、その制約の中でも、言語全体を扱うようバランスに配慮している。そのため本シリーズの文法書はシリーズの編集委員会を中心に、複数名による査読を経た上で加筆修正が重ねられている。

さて、そのような言語の記述文法書は、どのようにしてできるのであろうか。それは調査者が当該言語の話者を相手に、ただただ地道にデータを集めることから始まる。多くの場合は何らかの媒介言語を通し、「あなたの言語で『犬』はなんと言いますか？」「『猫』はなんと言いますか？」「『私は走る』は？」「『あなたは走る』は？」と聞いていく。そして、そこに見られるパターン、つまり発音や、語形成、文形成の法則をこつこつと解き明かしていく。生の言語資料は混沌とした様相を見せ、容易にはパターンなど見えてこない。話者は、その言語を知っているからこそ、それを自由に操り、話者同士でのコミュニケーションを成立させているはずだが、その文法については無意識である。ある語の発音、あるいは語や文が「正しい（と感じられる）」か「不自然」あるいは「言えない」かは教えてくれる。しかし、それ以上のことを他者に説明することはできない。データと格闘し、そこにあるはずの法則を探すのは研究者自身なのだ。一言語の文法全体がある程度でも形を見せてくれるまでには、何年もその格闘を続けなければならない。新たなデータが収集されると、それまで見えていたはずの法則が崩れることも少なくない。そこからはまたデータとの新たな格闘が始まる。昨今、どのような研究分野でも、とかく「革新性・斬新さ・新規さ」などが求められるが、そのような華々しさはそこにはない。

言語資料を分析する道具、すなわち言語学の方法論も進化を続けている。調査研究が不十分であった多くの言語について研究が進むにつれ、それまで知られていなかった言語現象が見つかることがある。すると逆に、これまで研究してきた言語でも、同様の現象があったのに、研究者がそれを念頭において調査していなかったために、その言語にはそれがないと思っていただけという可能性が出てくる。研究の進化が、新しい疑問・質問を生み出すのである。すなわち、文法記述の営みには終わりがない。

このような地味で根気のいる調査研究を、まるで何かに取り憑かれたかのように取り組み続ける言語研究者も多い。話者と対峙して調査し、その言語の理法を解き明かし、全体像を整理し記述していくことは、実は言語研究の中でも、もっとも知的興奮に満ちているからではなかろうか。

本シリーズは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）の研究活動の一環として企画された。AA 研は 1964 年の創設以来、アジア・アフリカ地域を中心として、さまざまな言語の語彙集・辞書および教材開発などに取り組んできた。しかし、活動成果として記述文法書が公刊されることは少なかった。文法書を整備し、その穴を埋めるべく AA 研内で本シリーズは立案された。

このようなマイナーな言語の文法書の刊行は、特殊な文字・記号を使った複雑な組版となるため、多大な労力を必要とする。本シリーズの編集委員会は、このようなシリーズ出版を、その意義を認めて引き受けてくださったくろしお出版に対し、感謝の意を表したい。

なお、それぞれの本について、本には収められなかった追加の情報、写真、音声などをウェブサイト上に載せるので、そちらも合わせてご覧いただきたい (<http://www.9640.jp/rq/>)。

本シリーズが長く続き、若い学生・研究者が新しい言語に取り組むきっかけになり、あるいは一般の「ことば好き」な人が、今までその名前を聞いたこともなかった言語の世界を知るきっかけになること、そして、ここからさらに日本の言語研究が発展するひとつの礎となることを願う。

2018 年 3 月
シリーズ記述文法 編集委員会一同

目 次

シリーズ刊行にあたって	i
略号リスト	xvii
<hr/>	
第1章 伊良部島方言の概要	1
1.1. 地理	1
1.2. 系統	2
1.3. 言語の名前	3
1.4. 伊良部島内部の方言差と本書の記述する対象	3
1.5. 話者数	5
1.6. 先行研究	6
1.7. 研究データ	7
<hr/>	
第2章 音韻論	9
2.1 音韻論の記述の前に	9
2.1.1 「語」について	9
2.1.2. 音韻標示について	10
2.2. 音素目録	10
2.2.1. 子音	10
2.2.2. 半母音	12
2.2.3. 母音	12
2.3. 最小対と疑似最小対	13
2.3.1. 子音	14
2.3.2. 半母音	14
2.3.3. 母音	14
2.4. 単純語の音節構造	14
2.4.1. 音節の3タイプ	14

2.4.2. 特記すべき事項	17
2.4.3. 重音節と超重音節	18
2.4.4. 長母音と二重母音	18
2.5. モーラ	19
2.5.1. 定義	19
2.5.2. 最小語制約	20
2.5.3. 長さ	20
2.5.3.1. 長短の対立	20
2.5.3.2. 軽音節 (CV) vs. 重音節 (CCV)	21
2.6. 音韻規則	22
2.6.1. 連濁	22
2.6.2. 重子音化規則	23
2.6.3. /h/ 挿入規則	24
2.6.4. /h/ 拡張規則	27
2.6.5. 共鳴重子音削除規則	28
2.6.6. 鼻子音連続削除規則	29
2.6.7. 特定の形態素に見られる音韻規則	29
2.6.7.1. /j/ 挿入規則 (主題助詞, 対格助詞, 第二対格助詞)	29
2.6.7.2. /s/-/t/ 同化規則	30
2.7. その他の分節音韻論的諸問題	31
2.7.1. /ɿ/ の音韻解釈	31
2.7.2. 長母音の音韻解釈	33
2.7.3. /ɪ/ の解釈とその問題点	34
2.8. 韻律	35
2.8.1. 単純語の韻律	36
2.8.1.1. 2モーラ語	36
2.8.1.2. 3モーラ語	37
2.8.1.3. 4モーラ以上の語	38
2.8.1.4. ここまでまとめ	39
2.8.2. フット構造	40
2.8.2.1. フットの定義	40
2.8.2.2. 3モーラフット	41
2.8.3. トーン付与	44
2.8.3.1. リズム交替の原理	44
2.8.3.2. 規則	44
2.8.3.3. ここまでまとめ	46
2.8.4. HL 交替の句への拡張	47
2.9. 統語的複合語の音韻的特徴	50

第3章 記述の諸単位	53
3.1. 語・接語・接辞の区別	53
3.1.1. 形態統語的自立性	54
3.1.1.1. 基準①内部要素の結束性の有無	54
3.1.1.2. 基準②共起制限の度合い	56
3.1.2. 音韻的自立性	59
3.1.2.1. 概要	59
3.1.2.2. HL 交替と接辞・接語	59
3.1.2.3. 内的接語 (internal clitic) と外的接語 (external clitic)	61
3.1.2.4. 外的接語の韻律的特徴	62
3.1.3. bound word タイプの接語	64
3.1.4. 文法化	65
3.1.4.1. 補助動詞	65
3.1.4.2. 形式名詞	67
3.1.4.3. 接続助詞	68
3.1.4.4. 二次的屈折接辞	69
3.2. 語類 (word class)	71
3.2.1. 名詞類	72
3.2.2. 連体詞	72
3.2.3. 動詞	72
3.2.4. 形容詞	72
3.2.5. 助詞	73
3.2.5.1. 句を統語的ホストに取る助詞	73
3.2.5.2. 節を統語的ホストに取る助詞	74
3.2.6. その他の語類	75
3.2.6.1. 副詞	75
3.2.6.2. 接続詞	76
3.2.6.3. 間投詞	76
3.2.6.4. <i>mmja</i> について	77
3.2.7. 品詞転換	77
3.2.7.1. 名詞語幹の派生	77
3.2.7.2. 動詞語幹の派生	78
3.2.7.3. PC 語幹の派生	79
3.3. 文法関係	80
3.3.1. 主語	80
3.3.2. 直接目的語	83
3.3.3. 間接目的語	84
3.4. 形態法の類型	86

3.4.1.	語根と語幹.....	86
3.4.2.	複合.....	87
3.4.2.1.	複合名詞.....	87
3.4.2.2.	複合動詞.....	88
3.4.2.3.	複合 PC 語幹.....	88
3.4.2.4.	複合語の構造.....	89
3.4.2.5.	複合語と句の区別.....	90
3.4.3.	重複.....	91
<hr/> 第4章 名詞句.....		95
4.1.	従属部.....	95
4.1.1.	従属部に名詞句が立つ場合.....	95
4.1.2.	連体詞および連体節による修飾.....	97
4.1.3.	従属部を埋めるその他の要素.....	97
4.2.	主要部.....	98
4.2.1.	形式名詞.....	98
4.2.1.1.	<i>tukja</i> 「時」.....	99
4.2.1.2.	<i>mai</i> 「前」.....	99
4.2.1.3.	<i>atu</i> 「後」.....	99
4.2.1.4.	= <i>kja</i> 「時, 間, まで」.....	100
4.2.1.5.	<i>kutu</i> 「こと」, <i>gumata</i> 「予定」.....	100
4.2.1.6.	<i>tami</i> 「ため」.....	101
4.2.1.7.	<i>jau</i> 「よう (にする)」.....	101
4.2.1.8.	<i>njaa</i> 「よう (見える, etc.)」.....	102
4.2.1.9.	= <i>su</i> 「人, もの, こと」.....	102
4.2.1.10.	<i>munu</i> 「人, もの, こと」.....	104
4.2.2.	主要部を欠く名詞句 (準体).....	104
4.3.	格.....	106
4.3.1.	格助詞のリスト.....	106
4.3.2.	主格と属格.....	107
4.3.3.	対格と第二対格.....	110
4.3.3.1.	中止形節に生じる傾向.....	111
4.3.3.2.	非完結アスペクト節に生じる傾向.....	112
4.3.3.3.	第二対格目的語が動詞直前位置に生じる傾向.....	113
4.3.3.4.	自動詞主語の第二対格標示.....	114
4.3.3.5.	第二対格助詞と主題助詞.....	115
4.3.4.	与格と方向格.....	116
4.3.4.1.	D類 : 場所.....	116

4.3.4.2. D 類：時間	117
4.3.4.3. D 類：所有者	118
4.3.4.4. D 類：経験者	118
4.3.4.5. D 類：受動文の動作主	119
4.3.4.6. D/A 類：変化の結果①	119
4.3.4.7. D/A 類：被使役者	121
4.3.4.8. D/A 類：受益者	121
4.3.4.9. D/A 類および A/D 類の着点①②	123
4.3.4.10. A 類：移動の目標	125
4.3.4.11. A 類：変化の結果②	126
4.3.4.12. A 類：発話相手	127
4.3.5. 具格 $=sii$	127
4.3.6. 共格 $=tu$	128
4.3.7. 比格 $=jarruu$	129
4.3.8. 奪格 $=kara$	130
4.3.9. 限界格 $=gami$	131
<hr/> 第 5 章 名詞類	133
5.1. 代名詞	133
5.1.1. 人称代名詞	133
5.1.1.1. 概要	133
5.1.1.2. 1 人称代名詞の形式	134
5.1.1.3. 除外と包括	136
5.1.1.4. 双数形	137
5.1.1.5. 人称代名詞体系の再考：Augment システムとして	138
5.1.2. 再帰代名詞	139
5.2. 名詞	140
5.3. 数詞	141
5.4. 名詞形態論	144
5.4.1. 指小辞	144
5.4.2. 複数接辞	144
5.4.2.1. 一般複数 $-mmi$	145
5.4.2.2. 近似複数 $-ta$	145
5.4.3. 曖昧化接辞 $-nagi$	146
<hr/> 第 6 章 指示詞と疑問詞	147
6.1. 指示詞	148

6.1.1.	体系.....	148
6.1.2.	指示代名詞.....	149
6.1.3.	指示場所名詞.....	152
6.1.4.	指示様態詞.....	153
6.1.5.	指示連体詞.....	154
6.2.	疑問詞.....	155
6.2.1.	体系.....	155
6.2.2.	疑問代名詞.....	155
6.2.3.	疑問場所名詞.....	156
6.2.4.	選択疑問名詞.....	157
6.2.5.	疑問時間名詞.....	157
6.2.6.	疑問数量名詞と疑問数詞.....	158
6.2.7.	疑問様態詞.....	159
6.2.8.	疑問理由副詞.....	159
6.2.9.	不定表現.....	160
<hr/> 第7章 動詞の構造.....		161
7.1.	概要.....	161
7.2.	語幹.....	163
7.2.1.	語幹クラス.....	163
7.2.2.	語幹の種類.....	164
7.2.2.1.	語幹末が /k, g/ の場合.....	165
7.2.2.2.	語幹末がそれ以外の閉鎖音の場合.....	166
7.2.2.3.	語幹末が摩擦音の場合.....	166
7.2.2.4.	語幹末が共鳴音の場合 (/v/ 以外).....	167
7.2.2.5.	語幹末が共鳴音の単子音 /v/ の場合.....	168
7.2.2.6.	<i>fau</i> 「食べる」の語幹形成.....	168
7.2.3.	語幹の機能.....	169
7.2.3.1.	機能と形式の対応.....	169
7.2.3.2.	名詞語幹としての機能.....	170
7.2.3.3.	動詞重複形の入力語幹としての機能.....	171
7.2.3.4.	複合動詞の前項としての機能.....	172
7.2.3.5.	動詞焦点構文の補語としての機能.....	172
7.2.3.6.	定動詞直説法の語幹.....	173
7.2.4.	語幹拡張辞.....	173
7.3.	屈折形態論.....	176
7.3.1.	定動詞.....	176
7.3.1.1.	直説法.....	177

7.3.1.2. 希求法	178
7.3.2. 副動詞	179
7.3.2.1. 中止形	179
7.3.2.2. その他の副動詞	181
7.3.3. 特殊な動詞の屈折パターン	182
7.3.3.1. (a) <i>si</i> 「する」の語幹形成	182
7.3.3.2. <i>ff[V]-</i> 「来る」の語幹形成	183
7.3.3.3. 存在否定動詞 <i>nja-</i> 「ない」	186
7.3.4. 存在動詞・状態動詞・ アスペクト補助動詞・コピュラ動詞の比較	186
7.3.4.1. 存在動詞	187
7.3.4.2. 状態動詞	189
7.3.4.3. アスペクト補助動詞	189
7.3.4.4. コピュラ動詞	191
7.4. 語幹の内部の構造	192
7.4.1. 語幹核	192
7.4.2. 派生接辞類と語幹のクラス	193
7.4.2.1. 使役接辞 <i>-simi</i> , <i>-as</i>	194
7.4.2.2. 受動接辞 <i>-(r)ai</i>	194
7.4.2.3. 尊敬接辞 <i>-(s)ama(r)</i>	195
<hr/> 第8章 PC語群 (Property Concept words)	197
8.1. 概要	197
8.2. PC語根	199
8.2.1. PC語根の品詞性	199
8.2.2. PC語根と名詞語根の連続性	201
8.3. PC語根から形成される諸形式	207
8.3.1. 動詞形式 (PC動詞)	207
8.3.2. 複合名詞形式	209
8.3.3. 準複合名詞	210
8.3.4. 形容詞 (PC語根の重複形式)	211
8.3.5. 状態名詞化 <i>-sa</i>	212
8.4. 統語機能・意味・談話から見た複合, 準複合, PC動詞, 形容詞	213
8.4.1. 分布特徴	213
8.4.2. 主節述語として: 複合名詞 vs. 準複合名詞 vs. PC動詞	214
8.4.3. 名詞修飾要素として: 形容詞 vs. PC動詞	215

第 9 章　述語句の構造	217
9.1. 動詞述語の分類	217
9.2. 複合動詞	218
9.2.1. V ₁ の語幹形式	218
9.2.2. 語彙的複合動詞	218
9.2.3. 統語的複合動詞	221
9.3. 補助動詞構文	224
9.3.1. アスペクト補助動詞構文	224
9.3.1.1. 繼続相構文 (V ₂ : <i>ur</i>)	224
9.3.1.2. 残存結果相構文 (V ₂ : <i>ar</i>)	225
9.3.1.3. 消失結果相構文 (V ₂ : <i>njaan</i>)	226
9.3.2. モーダル補助動詞構文	227
9.3.2.1. 展望モーダル構文 (V ₂ : <i>ufti</i>)	227
9.3.2.2. 試行モーダル構文 (V ₂ : <i>mir</i>)	228
9.3.3. 方向補助動詞構文	228
9.3.3.1. 求心的方向構文 (V ₂ : <i>fitt</i>)	228
9.3.3.2. 遠心的方向構文 (V ₂ : <i>iftt</i>)	229
9.3.4. 受益補助動詞構文	230
9.4. 軽動詞構文	230
9.4.1. 軽動詞 (<i>a</i>) <i>si</i> を使った構文	230
9.4.1.1. 動詞焦点構文	230
9.4.1.2. 動詞重複構文	232
9.4.2. 状態動詞 <i>ar</i> を用いる場合 (クアル構文)	233
9.5. 名詞述語	235
 第 10 章　助詞	237
10.1. 助詞の分類	237
10.2. 限定助詞	238
10.2.1. 累加 = <i>mai</i> 「も」	238
10.2.2. 排他 = <i>tjaaki</i> 「だけ」	238
10.2.3. 反復 = <i>bakaar</i> 「ばかり」	239
10.2.4. 完全否定 = <i>cumma</i> 「(何) も」	239
10.2.5. 讓歩 = <i>dumma</i> 「～だって」	240
10.2.6. 優先 = <i>kara</i> 「まず～から」「～してから」	240
10.2.7. 対比 = <i>gami</i>	241
10.3. 情報構造助詞	243

10.3.1. 主題助詞	243
10.3.1.1. 対格主題 = <i>ba</i>	243
10.3.1.2. 一般主題 = <i>a</i>	244
10.3.2. 焦点助詞	246
10.4. モーダル助詞	246
10.4.1. Yes-No 自問 = <i>bjaam</i>	246
10.4.2. WH 自問 = <i>gagara</i>	247
10.4.3. 推測 = <i>pazi</i> 「～だろう, かもしれない」	248
10.4.4. 断定 = <i>dara</i>	249
10.4.5. 同意要求 = <i>suda</i>	249
10.5. 接続助詞	250
10.5.1. 引用 = <i>ti</i>	250
10.5.2. 逆接 = <i>suga</i>	251
10.5.3. 順接 = <i>ssiba</i>	252
10.6. 終助詞	253
10.6.1. 訂正 = <i>ju</i>	253
10.6.2. 提題 = <i>da</i>	254
10.6.3. 確認要求 = <i>i</i>	254
10.6.4. いらだち = <i>ra</i> , = <i>sja</i>	255
10.6.5. 疑問 = <i>ru</i> , = <i>ga</i>	256
10.6.6. 疑問 = <i>e</i>	256
10.6.7. 非主語焦点 = <i>doo(i)</i>	258
10.6.8. 伝聞 = <i>ca</i> , = <i>tim</i>	259

第 11 章 単文の構文論	263
---------------------	-----

11.1. 項構造	263
11.1.1. 概要	263
11.1.2. E 項について	264
11.2. 格配列	265
11.2.1. 主格対格型	266
11.2.2. 分裂自動詞性	267
11.2.3. ハダカ名詞句 (格助詞を伴わない名詞句)	269
11.3. ボイス	272
11.3.1. 使役	272
11.3.1.1. 形態的使役	272
11.3.1.2. 自他交替 (使役交替)	275
11.3.2. 受動	278
11.3.2.1. 直接受動	278

11.3.2.2. 間接受動	279
11.4. 可能	280
11.5. アスペクト	282
11.5.1. 体系の概要	282
11.5.2. 繼続相のアスペクト的意味	283
11.5.3. 残存結果相のアスペクト的意味	283
11.5.4. 消失結果相と残存結果相の対立に見るアスペクト的意味	285
11.5.5. 消失結果相の非実現バイアス	289
11.6. ムード	292
11.6.1. 直説法	292
11.6.1.1. 確信形	292
11.6.1.2. 基本形	293
11.6.2. 希求法	294
11.7. テンス	296
11.8. 情報構造	298
11.8.1. 係り結び	298
11.8.2. 焦点ドメインと焦点標示	300
11.8.2.1. 文焦点	300
11.8.2.2. 項焦点	301
11.8.2.3. 述語焦点	301
11.8.2.4. 動詞焦点	302
11.8.3. 焦点タイプと焦点標示	303
11.8.3.1. WH 焦点と WH 応答焦点	303
11.8.3.2. 対比焦点	305
<hr/> 第 12 章 複文	307
12.1. 節連結から見た文構造の分類	307
12.2. 主節並置（単文構造）と等位接続	307
12.2.1. 主節並置	307
12.2.2. 等位接続	308
12.2.2.1. 順接	308
12.2.2.2. 逆接	309
12.3. 従位接続	310
12.3.1. 周辺副詞節	310
12.3.1.1. 条件節と理由節	311
12.3.1.2. その他の周辺副詞節	312
12.3.2. 中核副詞節	314

12.3.3. 連体節.....	316
12.3.4. 補文(名詞節).....	318
12.4. 節の独立性.....	319
12.4.1. 定動詞屈折.....	320
12.4.2. 情報構造上の従属性.....	320
12.4.2.1. 主節並置.....	320
12.4.2.2. 等位接続.....	320
12.4.2.3. 周辺副詞節.....	323
12.4.2.4. 中核副詞節.....	325
12.4.3. 独自の主語を取れるか.....	326
12.5. 中止形節.....	326
引用文献.....	329
あとがき.....	337
索引.....	340

略号リスト

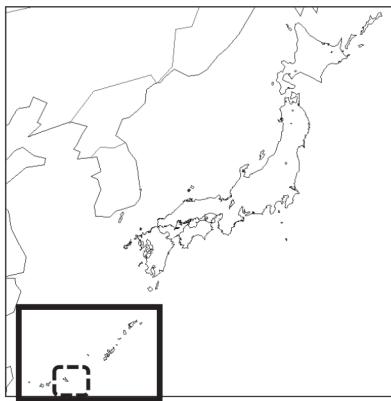
A	他動詞主語	CSL	causal (理由)
ABL	ablative (奪格)	DES	desiderative (願望)
ACC	accusative (対格)	DAT	dative (与格)
ACC2	second accusative (第二対格)	DIM	diminutive (指小辞)
ADR	addressive (同意要求)	DHD	dummy head (準複合)
ADT	additive (累加)	DSC	discourse marker (談話標識)
ALL	allative (方向格)	DU	dual (双数)
ANT	anterior (進展)	EMO	emotional (いらだち)
ANTC	anticipated future (確定未来)	ENDO	endocentric (求心)
APPR	approximative (曖昧性)	EXCL	exclusive (除外)
ASC	associative (共格)	EXO	exocentric (遠心)
ASR	assertive (主張)	FIL	filler (フィラー)
AVR	aversive (回避)	FNT	finite (定形)
BEN	benefactive (受益)	FOC	focus (焦点)
CAUS	causative (使役)	GEN	genitive (属格)
CLF	classifier (類別)	HON	honorific (尊敬)
CMP	comparative (比格)	HS	hearsay (伝聞)
CNC	concessive (逆接)	IMP	imperative (命令)
CND	conditional (条件)	INCL	inclusive (包括)
CNF	confirmative (確認要求)	INF	infinitive (非定形)
CNG	complete negation (完全否定)	INST	instrumental (具格)
CNJ	conjunction (接続詞)	INT	intentional (意志)
CNTR	contrastive (対比)	INTJ	interjection (間投詞)
CNTN	continuous (恒常)	LCTN	low certainty (推測)
CNT	conative (経験)	LMT	limitative (限界格)
COP	copula (コピュラ)	MAL	malefactive (間接受動)
COR	corrective (訂正)	NEG	negative (否定)
CRCM	circumstantial (状況)	NLZ	nominalizer (名詞化)
CRTN	certainty (断定)	NOM	nominative (主格)

第1章

伊良部島方言の概要

1.1. 地理

本書は、琉球諸語に属する南琉球宮古語伊良部島方言（以下、伊良部島方言）の記述文法書である。伊良部島方言は沖縄県宮古島市伊良部島で話されている言語である。地図1に日本列島における琉球列島の位置（太枠）と宮古群島の位置（破線枠）、および破線枠の拡大図（宮古群島と伊良部島の位置関係）を示す。



第2章

音韻論

2.1 音韻論の記述の前に

2.1.1 「語」について

本章以降、「語頭」「語中」「語末」「語境界」という表現が頻繁に用いられる。語の詳しい定義と認定法は §3.1 で行うが、ここで簡単に用語の導入を行っておく。語は音韻的にも形態統語的にも自立している。接語は語と同様、形態統語的に自立しているが、音韻的には従属している単位である。接辞は語の内部にあって、形態統語的にも音韻的にも従属している。語が单一の形態素から成り立っている場合、それを単純語と呼び、複数の形態素から成り立っている場合、それを合成語と呼んで区別するが、区別が不要な場合は単に語と呼ぶ。語と接語からなる要素を拡張語と呼ぶ。これは伝統的に文節と呼ばれてきた単位に相当する。語は最小の拡張語と見ることができる。

(2-1)	a. 語	b. 語 (合成語)	c. 拡張語
	jarabi	biki+jarabi-gama	biki+jarabi-gama=kara=mai
	子供	男+子供-DIM	男+子供-DIM=ABL=ADT
	「子供」	「男の子」	「男の子からも」

接辞境界はハイフン (-) で、接語境界はイコール (=) で、語幹境界はプラス (+) で標示する。本書では、拡張語ごとにスペースを入れる。拡張語は韻律規則 (§2.8) や音節構造に関する制約 (§2.4)、音韻規則 (§2.6) の適用単位に

第3章

記述の諸単位

3.1. 語・接語・接辞の区別

語は、形態統語的にも音韻的にも自立した単位である。接辞とは、形態統語的にも音韻的にも従属した単位である。統語的複合語（§2.9）の語幹は音韻的に自立している一方、形態統語的には従属的である。これとミラーイメージにあるのが接語であり、これは音韻的には従属しているが、形態統語的には自立している。

表 3-1. 形態統語的自立性と音韻的自立性

		音韻的に	
		自立	従属
形態統語的に	自立	語	接語
	従属	複合語幹	接辞

以下、統語的ホストと音韻的ホストという用語を導入する。統語的ホストは形態素 M が構造的に接続する構成素である。格助詞ならば名詞句、終助詞ならば節全体、名詞接辞なら名詞語幹などである。一方、音韻的ホストは M を含んでともに HL 交替のドメインを構成する要素である。*banti=ga ffa-gama=kara* 「俺たちの子供たちから」という名詞句において、奪格助詞 =*kara* 「から」の統語的ホストは名詞句全体 (*banti=ga ffa-gama*) であり、音

第4章

名詞句

本章では名詞句の構造と機能を記述する。名詞句は（従属部+）主要部の構造を持ち、項として機能する場合、これに格助詞が接続して拡張名詞句（extended NP）を構成する。述語として機能する場合は、名詞句にそのままコピュラが後続する。

$$(4-1) \quad [[(\text{従属部}+) \quad \text{主要部}]_{\text{NP}} \quad = \text{格}]_{\text{ExNP}}$$

項となる場合、格助詞の接続はほぼ義務的であって、格助詞の脱落はごく稀にしか生じず、また談話の書き起こしでそのような例が生じていても、話者は必ず格助詞を補って再現する。口語においてこのような義務的な格標示が見られる点で、伊良部島方言および宮古語一般は日琉諸語の中でも極めて珍しい。この格助詞の脱落現象については§11.2.3で詳しく論じる。

4.1. 従属部

4.1.1. 従属部に名詞句が立つ場合

従属部に立つ名詞句は、属格を取って拡張名詞句を構成し、これに主要部が後続する。従属部の名詞句は、それが名詞であっても代名詞であっても義務的に属格を取る。属格は主格と同形であり、=ga か =nu のいずれかを取る。大まかに言って、名詞句階層上位の極（代名詞から下位へ向かって）は =ga を、下位（無生物から上位へ向かって）は =nu を取る傾向にあるが、それだけでは説明できない（§4.3.2）。以下に挙げるよう、属格は所有関係に

第 5 章

名詞類

5.1. 代名詞

代名詞は人称代名詞、指示代名詞、疑問代名詞、再帰代名詞からなり、本節では人称代名詞と再帰代名詞を扱う。指示代名詞は §6.1.2、疑問代名詞は §6.2.2 を参照されたい。

代名詞は名詞句の主要部に立ち、名詞類の下位クラスである。主格・属格助詞として (=nu ではなく) =ga を取り、人を指す場合に義務的に単数・複数の区別を有する点で一貫した振る舞いを示す。この点で疑問代名詞 *taru* 「誰」は例外的であり、主格・属格助詞として =nu のみを取り、数の標示は義務的ではない（が、可能である）(§6.2.2)。

5.1.1. 人称代名詞

5.1.1.1. 概要

人称代名詞を、発話場面における話し手（1人称）、聞き手（2人称）、それ以外（3人称）を指示するための専用形式であると規定すると、伊良部島方言には1人称代名詞と2人称代名詞が存在するが、3人称代名詞は存在しない。3人称指示対象は、発話現場における遠近に応じて使い分けられる指示代名詞や固有名詞などが様々に用いられ、3人称指示に使われる義務的な専用形式がない。いわゆる ‘two person’ type (Bhat 2004: 134) の人称代名詞体系である。

指示詞と疑問詞

疑問詞、指示詞、代名詞は、それぞれ1つの機能類をなす。以下の表で、機能類は太枠で囲んである。代名詞は全て同じ語類（名詞類）に属し、そのうち人称代名詞と再帰代名詞は§5.1で記述した。疑問詞は3つの語類（名詞類、連体詞、副詞）にまたがって分布し、指示詞は2つの語類（名詞類、連体詞）にまたがって分布する。一方、疑問代名詞と指示代名詞は、1つの語類（名詞類）に属しながら、複数の機能類（疑問代名詞は疑問詞と代名詞、指示代名詞は指示詞と代名詞）にまたがって分布する。

表 6-1. 指示詞・代名詞・疑問詞

代名詞	疑問詞	指示詞	
	疑問代名詞 (e.g. taru「誰」)	指示代名詞 (e.g. kuri「これ」)	人称代名詞 (e.g. wa「2SG」) 再帰代名詞 (na(r)a「自分」)
	疑問場所名詞 (e.g. nza「どこ」)	指示場所名詞 (e.g. kuma「ここ」)	
	選択疑問名詞 (nzi「どっち」)		
	疑問様態名詞 (nausi「どう」)	指示様態名詞 (e.g. kui「こう」)	
	疑問連体詞 (nzinu「どの」)	指示連体詞 (e.g. kunu「この」)	
	疑問理由副詞 (nausiti「なぜ」)		

動詞の構造

7.1. 概要

動詞は屈折カテゴリーによって定動詞と副動詞に区分される。屈折カテゴリーは肯否・テンス・ムードの3つを設定する。定動詞はテンス・ムードのいずれかで屈折し、ほとんどは肯否でも屈折する。副動詞はテンス・ムードで屈折せず、肯否については一部の副動詞が屈折する。

表 7-1. 動詞の種類

統語環境		定動詞			副動詞	
		希求法	直説法			
			確信形	基本形		
統語環境	文末終止	○	○	○	×	
	連体節	×	×	○	×	
	準体節	×	×	○	×	
	副詞節	×	×	×	○	
屈折 カテゴリー	肯否	△	○	○	△	
	テンス	×	○	○	×	
	ムード	○	○	×	×	

定動詞は文終止の形である。しかし、このうち直説法基本形は連体節・準体節 (clause nominalization, masdar 節; §4.2.2) の述語としても使われる。一

第8章

PC 語群(Property Concept words)

8.1. 概要

伊良部島方言をはじめとする宮古語全般において、*taka-*「高い」や*imi-*「小さい」など、物の性質(property concept; Thompson 1988)を表す語根(PC語根)は拘束語根であり、複合や接辞による派生、重複など多様な形態論的操作によって語となる。これらの語は、物の性質を表す語としてひとつの機能類をなし、様々な品詞にまたがる。

PC語根は、(8-1)に見るように、名詞語根と複合し、複合名詞を形成することができる。この場合、語形全体は名詞類に属する。

(8-1) 複合名詞形式

- a. *taka+pžtu* b. *uku+pžtu* c. *imi+pžtu* d. *pinna+pžtu*
高い+人 大きい+人 小さい+人 変な+人

「(背が)高い人」「大きい人」「小さい人」「変な人」

- e. *uri=a daizinha taka+pžtu=dooi.*
3SG=TOP 大変な 高い+人=NFS

「彼はとても背が高い人だよ。」

準複合名詞形式は、上記の複合名詞形式の主要部名詞が形式名詞 *munu* 「人、もの、こと」(グロスは Dummy Head: DHD) になっている形式である。*munu* は、単に複合語の主要部名詞というより、叙述形容詞を形成する接辞

述語句の構造

9.1. 動詞述語の分類

動詞述語は、動詞語幹を2つ含む両肢述語と、動詞語幹を1つだけ含む单肢述語に大別される。7章では单肢述語構造だけを扱ってきたが、本章では両肢述語構造に焦点を当てる。両肢述語は、2語の句である補助動詞構文および軽動詞構文と、1語からなる統語的複合動詞と語彙的複合動詞に区分される。それぞれの特徴をまとめると表9-1のようになる。両肢述語を構成する動詞語幹を V_1 , V_2 と略語化して用いる。

表9-1. 両肢述語の分類

		V_1 は 独自の語幹核	V_1 に 焦点標示	V_2 は 文法形態素的
2語(句)	補助動詞構文	○	○	○
	軽動詞構文	○	○	○
1語	統語的複合動詞	○	○	×
	語彙的複合動詞	×	×	×

第 10 章

助詞

10.1. 助詞の分類

§3.2.5 で概説したように、助詞は、その統語的ホストによって、主に句に付く助詞（格助詞、限定助詞、情報構造助詞、接続助詞）と、節に付く助詞（モーダル助詞、接続助詞、終助詞）に区分される。

助詞は全て接語（§3.1.1）であり、音韻的ホストは直前の（拡張）語である。助詞は横並びに連続する場合がしばしばあるが、その場合、以下のような順序となる。外側に来るほど、その統語的ホスト（したがって音韻的ホストも）は多様となる。例えば、格助詞は名詞句だけを統語的ホストに取るため、その音韻的ホストは名詞類か、あるいは準体節の主要部である述語動詞かであるが、終助詞はどのような発話単位も統語的ホストに取るため、音韻的ホストを限定することはできない。

(10-1) 助詞の相互承接

名詞句の主要部 (= 格助詞) (= 限定助詞) (= 情報構造助詞)

述語の主要部 (= モーダル助詞) (= 接続助詞) (= 終助詞)

格助詞については 4 章で記述したので、以下ではそれ以外の助詞を記述する。

第 11 章

単文の構文論

11.1. 項構造

11.1.1. 概要

本節では、格配列（§11.2）とヴォイス（§11.3）の体系の記述において重要な項構造の概略を示し、用語を定義する。前提として、述語の描く出来事において必須の参与者がいくつあるかを問題にする意味的結合価（semantic valence）と、述語と文法関係を持つ項がいくつあるかを問題にする統語的結合価（syntactic valence）を区別する（Payne 1997）。ここでいう文法関係とは、伊良部島方言の文法記述においては、統語的に特徴付けられる主語・直接目的語を指す（§3.3）。

核項（core argument）は、述語に必須の参与者でありかつ述語と文法関係を持つ項であり、主語（S/A 項）・直接目的語（O 項）からなる。拡大核項（extension to core argument; E 項；Dixon and Aikhenvald 2000）は、述語に必須の参与者であると考えられるが、項になっていない（文法関係を示さない）項であり、以下で述べるように「なる」の主題項や間接目的語をこれに含むことができる。周辺項（peripheral argument）は述語の必須の参与者と考えられず、文法関係も持たない項であり、例えば動作の様態を示す具格名詞句がこれに当たる。

以上の 3 種類の項のうち、統語構造に大きく関わるのは核項と拡大核項である。伊良部島方言の単文は、S (+E) の自動詞文と A+O (+E) の他動詞

第12章

複文

12.1. 節連結から見た文構造の分類

節連結の観点から文構造を単文と複文に区分すると、複文はさらに等位接続構造 (coordination) と従位接続構造 (subordination) に区分できる。本章では複文構造の記述に焦点を当てるが、その際、特に等位接続構造との比較のために、主節並置構造（単文同士を並置し、接続詞 (§3.2.6.2) を介して繋ぐ構造）も記述する。

従位接続構造は、従属節が副詞句として埋め込まれる副詞節構造、形容詞節として埋め込まれる連体節構造、名詞節として埋め込まれる補文節構造に下位区分される。副詞節構造はさらに、文副詞として文の周辺部に埋め込まれる周辺副詞節 (adsentential clause) と、述語の修飾として埋め込まれる中核副詞節 (adverbial clause) に分けられる。

12.2. 主節並置（単文構造）と等位接続

12.2.1. 主節並置

主節並置構造は、定動詞述語の主節同士が接続詞を介して並置される構造である。本書では、主節並置に置かれた2つの主節の間に文の境界があると見て、ピリオドをうっている。

シリーズ記述文法について

本シリーズの文法書は、執筆者みずからが現地調査に赴き、そこで得た一次資料をもとに研究し明らかにした文法体系をまとめた、いわゆる少数言語の記述文法書です。本シリーズの特徴は、これまで十分には調査研究されてこなかった言語（方言）を対象としていること、対象言語の文法全体（音韻論を含む）を記述していること、信頼できる内容であり、専門性を高く保ちつつも、当該言語の専門家でない方にも理解できる記述となっていることです。

編集委員会（五十音順。＊は代表）

小林正人（こばやし・まさと）	東京大学大学院人文社会系研究科
澤田英夫（さわだ・ひでお）	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
下地理則（しもじ・みちのり）	九州大学大学院人文科学研究院
千田俊太郎（ちだ・しゅんたろう）	京都大学大学院文学研究科
星泉（ほし・いずみ）	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
山越康裕（やまこし・やすひろ）	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
米田信子（よねだ・のぶこ）	大阪大学大学院言語文化研究科
渡辺己（わたなべ・おのれ）*	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所